

平成 22 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19520232

研究課題名 (和文) フランス中世における文学の場の総合的研究

研究課題名 (英文) Synthetic studies on circumstances of literature in Middle Ages in France

研究代表者

原野 昇 (HARANO NOBORU)

広島大学・大学院文学研究科・名誉教授

研究者番号：80069161

研究代表者の専門分野：フランス中世文学語学, 文献学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：仏文学, 西洋史

## 1. 研究計画の概要

「文学の場」とは、作者が作品を創作する場、および、鑑賞者（聴衆／読者）が作品を享受する場のことである。この場合「場」とは、空間的場所を指すと同時に、社会システムの中における場、およびその人間関係をも指す。

ロベール・エスカルピ Robert Escarpit はその著『文学の社会学』*Sociologie de la littérature*の中で、文学活動、すなわち作者による作品創造、伝播、鑑賞者（聴衆／読者）による作品の鑑賞・享受を生産—流通—消費のシステムにおいてとらえ、時代および地域によるその変遷や種々相を文学社会学の研究対象とした。本研究ではそのエスカルピの枠組みを参考にし、フランス中世における作者の社会的立場、写字生による写本制作の実態、聴衆／読者による作品の鑑賞・享受の実態を明らかにすることを目的とする。

## (1) 写本制作の実態の解明

パリ、フランス国立図書館等所蔵のフランス語中世写本をできるだけ多く調査する。そして各羊皮紙写本において、テキスト本文以外の朱見出し (rubrique), エクスプリシット (explicit), および欄外書き込みなどのパラ・テキストを手がかりに、フランス中世写本制作の実態に迫る。

## (2) 文学作品鑑賞の実態解明

フランス中世の文学作品は、いつ、どこで、誰によって、どのような機会に歌われたり、上演されたり、朗読されたりして、聴衆／読者（鑑賞者）に受け渡されたのかを、(a)シャンソン・ド・ジェスト (武勲詩), (b)ロマン (物語), (c)ファブリオおよび『狐物語』などのジ

ャンルごとに明らかにする。

(3)上記(1)および(2)で得られた結果をもとに、フランス中世文学のジャンルの問題と、創作—伝播—鑑賞の形式との関連を明らかにする。

## 2. 研究の進捗状況

(1)フランス中世の文学作品の創作者、媒介者、聴衆／読者（鑑賞者）の場の実態解明の課題と、文学ジャンルの問題と創作—伝播—鑑賞の形式との関連を明らかにするという課題に関しては、池上俊一・東京大学教授、河原温・首都大学東京教授、木俣元一・名古屋大学教授らの助言・協力を得ることができ、ほぼ順調に研究が進捗している。

(2) フランス中世における写本制作の実態解明から「文学の場」を明らかにする課題に関しては、フランスをはじめヨーロッパ各地の図書館に所蔵されているフランス語写本をできるだけ多く調査しなければならない。現時点ではパリのフランス国立図書館、サント・ジュヌヴィエーヴ図書館、スイスのボドメル図書館で調査を行なったが、調査できた写本の数は僅かである。

## 3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)

(1) 特に広島大学ヨーロッパ中世研究会において、毎年テーマを決めて、歴史、思想、イギリス文学・語学の専門研究者と、従来の専門領域の枠にとられない学際的研究を推進してきた。取り上げたテーマは、「中世ヨーロッパにおける笑い」(平成 19 年度)、「中世ヨ

ヨーロッパにおける伝統と刷新」(平成20年度)、「中世ヨーロッパにおける祝宴」(平成21年度)であるが、筆者はつねに「文学の場」の視点から他の研究者の研究成果を取り入れ、フランス中世文学を中心に研究を進めてきている。

(2) 佐藤彰一・名古屋大学名誉教授、池上俊一・東京大学教授、河原温・首都大学東京教授らと、ヨーロッパ中世を多角的、複眼的にとらえなおすプロジェクトに参画し、ここでも筆者はフランス中世文学を中心とするヨーロッパ文学を担当し、社会のなかにおける文学の問題を「文学の場」の視点からとらえなおして発表した。

(3) 外国の図書館所蔵のフランス中世写本をできるだけ多く調査する予定は、十分な調査時間を確保することが難しく、その上多くの写本がマイクロフィルムのみ利用を余儀なくされ、細かな書き込みの調査をじゅうぶん行なうことができていない。

#### 4. 今後の研究の推進方策

(1) 祝祭、そのなかの宴会と「文学の場」との関係、特に宮廷における宴会、祝宴と宮廷風騎士物語(ロマン)との関連を、フランス中世文学の具体的な作品をとりあげながら、実証的に究明していきたい。

(2) 中世における女性知識人にとっての「文学の場」を明らかにする。特に北フランスにおける女性作家の嚆矢とされているマリ・ド・フランスについて、その実像に迫る。マリ・ド・フランスの生涯については詳細が明らかでないが、実在の歴史上の人物をあげての諸説を検討し、最近主張されるようになってきたマリ・ド・フランスはトマス・ベケットの妹のマリ・ベケットであるとする説を中心に、そう仮定した場合にみえてくる「文学の場」、特に女子修道院における女性知識人の「文学の場」を究明する。2010年秋にスイスで開催が予定されているトマス・ベケットを中心とする知識人グループ(マリ・ベケットを含む)に関する国際会議に参加して最新情報を収集するとともに、第一線で活躍中の研究者と意見交換を行ないたい。

#### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

① HARANO Noboru, *Sous quel nom désigner une partie du ms.H du Roman de Renart ?*, *Reinardus*, 査読あり, vol.19, 2007, pp.75-82.

〔学会発表〕(計5件)

① 原野昇「フランス中世文学にみる祝宴」, 広島大学ヨーロッパ中世研究会, 2009年11月12日, 広島大学

② 原野昇「『狐物語』第3枝篇とその源泉」,

第28回広島大学フランス文学研究会, 2009年8月1日, 広島大学

③ 原野昇「フランス中世文学にみる伝統と刷新—トリスタン伝説を例に」, 広島大学ヨーロッパ中世研究会, 2008年11月13日, 広島大学

④ 原野昇「フランス中世文学にみる笑い—笑いの社会性」, 広島大学ヨーロッパ中世研究会, 2007年11月15日, 広島大学

⑤ 原野昇「フランス中世文学におけるロマン(物語)再考」, 第26回広島大学フランス文学研究会, 2007年7月21日, 広島大学

〔図書〕(計5件)

① 原野昇・木俣元一, 岩波書店『芸術のトポス』2009, pp.17-148, 291-302.

② 原野昇ほか, 音羽書房鶴見書店『イギリス・フランスのロマンス—語学的研究と文学的研究の壁を越えて』, 2009, pp.11-50.

③ 原野昇ほか, 溪水社『中世ヨーロッパにおける伝統と刷新』2009, pp.87-134.

④ 原野昇ほか, 溪水社『中世ヨーロッパにおける笑い』2008, pp.81-110.

⑤ 原野昇ほか, 溪水社『中世ヨーロッパにおける女と男』2007, pp.137-184.

〔その他〕(計5件)

① (書評) 原野昇「象徴史の確立—ミシェル・パストロー『ヨーロッパ中世象徴史』」, 『流域』64号, 2009, p.48-53.

② (書評) 原野昇「マリ・ド・フランスはトマス・ベケットの妹!」, 『流域』66号, (印刷中)

③ (翻訳・紹介) 原野昇「一写本の運命」, 『広島大学フランス文学研究』28号, (印刷中)

④ (報告) 原野昇「第22回国際アーサー王学会—レンヌ大会—報告」*Newsletter* (国際アーサー王学会日本支部) No.21, 2008, pp.4-7.

⑤ (書評) 原野昇「身近になった中世古典」, 『ふらんす』2007年12月号, p.72.